

平成二十二年九月一日発行（毎月一回一日発行）通巻八四八号

火星

平成二十二年九月号



七曜抄

(七)

山尾玉藻

じやがいもの花に雨ふる外宮かな

犬小屋の上十まりの袋掛

炎天を来し弓袋寝かされし

男来て田水握りし土用照

大阪の土用遣りゐる肘枕
一張羅着たる毛虫の急ぎをり
老眼鏡とりに入りけり庭花火
人の名を思ひ出したる片かげり
新聞に赤き実こぼす盆用意
倒れ木に二百十日の日射しあり

太白星

柳生千枝子

街いくつ失せたる地平燕来る
蟻出でてくるキラキラとキラキラと
螢来い死んで弟何処へ行きし
梅雨闇のどこかに予約席がある
風の夜の葉ざくらしのび笑ひせり
言ひ訳をしても遅刻や柿の花
草笛の音色を青と聞きぬたり

杉浦典子

勾玉のかたちに島の田水かな
木偶鬼となりたる月の涼しかり

いざなぎの岩の暗みし梅雨夕焼
空つぽの玉葱小屋の明易し
地すべりのあとのこの世を螢とぶ
岩に膝ついて螢火濃かりけり
掃き寄せて毛虫のいろの栗の花

浜口高子

郭公や余呉のまばらの時刻表
海鳴りに干し玉葱の皮落ちし
鯔跳ねて沼島の沼のそれつきり
考への古びてきたり河鹿川
三伏や田水とろりと動きたる
夕螢川に鉛筆おとしけり
月の沼舟虫走る影走る

火星作品 山尾玉藻選

角突きや棚田の底の明易し 神戸深澤 鱻

舟虫のかげ分けて来し祭足袋

まつすぐに夜焚の灯火もどり来し

ほうたるや島にひとつの学校田

かはほりの空となりたる市村座

傘ぬちに波音こもる花ざくろ 大和郡山城 孝子

草いちご島の裏手のきつね雨

石橋の苔に花咲き祭くる

布袋さんの腹のつめたき日の盛

蛸飯や縄まいてある舟柱

ゆつくりと島の老いゆく梅雨の月 宝塚蘭定かず子

傀儡座のきらきらと来る青田かな

橋の灯の阿波へかたぶくシャーベット

避暑の子に門浪大きく上がりけり
三伏の人の声する衣裳蔵
峰雲や穴子の腸のひとつまみ
海へ出てつばさありけり燕の子
海人の軒あれこれ干して明易し
空酒のまはつてきたる芥子の花
ひとところ軋みてゐたる木下闇
麦星やまつ黒に浮く近江富士
納屋口へ花合歡の風みけつ国
遊船を降り来し髪の匂ひけり
愛宕嶺のてつぺん曇る昼の川床
夕立の追ひかけてゆく網代笠
おのころは水田明りの袋掛
万華鏡のやうなパスの灯梅雨に入る
渦潮のあたり白帆明易し
磴の上には神楽殿あり大旱
夜の秋の傀儡の着る陣羽織

明石戸栗末廣

八幡大山文子

丸山照子

選のあとに

山尾 玉藻

角突きや棚田の底の明易し 深澤 鱧

作者の故郷新潟の山古志村の景であろう。山古志村は錦鯉と牛の角突きで有名であるが、周知の通り先の大地震で壊滅的な被害を受けた。しかし村人の努力で見事に村は再生、今では牛の角突きも再開されている。映像や写真で見ると、丘陵地の斜面は小さな棚田でびっしりと覆われ、村人の生活はまさしく「棚田の底」で静かに営まれているようだ。そのような中、「角突き」の牛の勇壮な闘争ぶりは、日頃は穏やかな村人たちを意気軒昂とさせるのだろう。その昂揚ぶりが「明易し」と大いに通じ合っている。

同時発表句へ舟虫のかげ分けて来し祭足袋は、真つ黒な「舟虫」を影と見立て、その影を真つ白な「祭足袋」が勢いよく散らしてくる様子が鮮やかに映像化されている一句。

石橋の苔に花咲き祭くる 城 孝子

作者がいつも渡っている苔むした古い石橋なのだろう。今日ふと見ると、その苔に細やかで美しい花が咲いていた。「祭

が近づいてくるといふ何とはないころの踊りが、見落としがちな「苔」の花に眼を止めさせたのだろう。この何気なさが良い。

恒星園作品へ凱旋の音に田植機もどりけり、巧みな隠喩法を生かし、「田植機」がひと仕事終えて賑やかな音と共に戻ってくる様子を描いている。

ゆつくりと島の老いゆく梅雨の月 蘭定かず子

沼島吟行で得られた句である。一時間ばかり島内を散策したが、出会うのは老人と子供達ばかりで、若者には殆ど出会わなかった。沼島の若者達も島を離れてゆくのだろう。「ゆつくりと」がもの悲しくひびき、島全体が古びてゆくような「島の老いゆく」も切ない。そこはかとなく漂う侘しさの中、「梅雨の月」を浴びる島が何かを訴えかけてくる。

同時発表作へ避暑の子に門浪大きく上がりけりのダイナミックで鮮烈な景は印象的である。

海へ出てつばさありけり燕の子 戸栗 末廣

巣立つて間のない「燕の子」は見るからに危なっかしい羽根使いをしており、飛んでいる様子で直ぐにそれと知れる。作者も覚束ない思いで「燕の子」を見ていたのだろうが、子燕が海の上へ出た途端、その羽根使いが急に確かになったと

感じたのである。海風に煽られて懸命に羽を張った様子が、「海へ出てつばさありけり」との感慨を呼んだのであるうが、なるほど真実がある。小さな生命に向ける慈しみ溢れる眼差しを感じる。

同時発表句〈空酒のまはつてきたる芥子の花〉は、「芥子の花」の揺れで酔いが一層まわつてきたようだ。昼酒は結構結構。しかし「空酒」はちとキツイ。お互いに慎みましようね。

(以下略)

恒星圈

同人 I

野澤あき

父の日の遙かとなりし父の背ナ
からたちの刺ある花の唄ひつぐ
鍵善に空席のなき梅雨晴間
泰山木咲ける関大幼稚園
半夏生電動金魚うらがへる

戸栗末廣

波田美智子

がまがへる神戸市北区藁の家
一木に白鷺十羽明易し
麦秋の馬磨かるる磧なか
花合歓に真白き雲のとどまれる
見覚えに席ゆづらるる薄暑かな

片隅は玉葱畑幼稚園
花石榴下を声行く老人会
婆二人長立話雲の峰
梔子の香にかすかなる目眩して
みちぐさに蚊帳吊草を裂きてをり

戸田春月

廣畑忠明

渦潮の渦は鳴門の笑窪なる
巢つばめに餌のゆたかな御食つ国
国生みの沼島鶯谷渡り
蜻蛉生れガイドの誇る神の裔
洞窟は黄泉のとば口磯つぐみ

船虫の驚き易し己が影
独り居に南天の花こぼれけり
庭下駄に隠れきれない蜥蜴の尾
神鈴のそれつきりなる夏木立
一村は夕靄の中合歓の花

獅子座

山尾玉藻推薦

笠置 早苗

見てゐたるたんぽぽの絮飛びにけり
猫の子を唾へゆく親緑雨中
遠雷のまま遠のきし鴉の子
夏落葉雨の匂ひの風がくる

田中文治

萍の花をのけくる亀の首
すすめられ妻より早き更衣
山城は慣はし多し瓜の花
郭公の声遠のきし畦の鋤

奥田 順子

航跡の渦のつぎつぎ梅雨兆す
きのふより雨のまつすぐ青葉肥
伊吹嶺の裾に刈藻のしづくせり
柿の花母となりたる牛の貌

松井 倫子

更衣緑青いろの沼に出で
谷風の山風となる夏芝居
水無月や杉板のせ来ライトバン
霾やマストの上の風向計

岩井 ひろこ

金平糖の箱振つてみし柿の花
洋館の土足厳禁棕櫚の花
青年の背丈となりし更衣
奥の院へ坂がかりなる藤の花

藤原 冬人

郵便夫出でくるモスク五月闌
中空に気球の浮かぶ入梅かな
畦に添ふ早苗のさ揺る月夜かな
銀紙の飴をまた剥く早梅雨

根本 ひろ子

美術館出でし正面桐咲けり
馬あらふ父を見てゐる裸の子
病葉の張りついてゐる陶の椅子
居酒屋の箆に夏菜莢盛られあり